
知的なふるまい、とはなんだろうか。

それは、自らの知識を覆い隠して、自らを下にみせる、「慎ましか」で「謙虚」な態度であろう。

そういう意味では「ニュース番組で一言しか発しないタモリ」や「少林サッカー」は、まさに知的な態度なのだ

「何も喋らない」か「過度に自分を馬鹿にみせる」ことが知的なふるまいなのだ

例えば一部の芸人が、自分をバカにみせるために知っていることをいわない、という態度なんて知的な振舞いそのものである

「バカだと思われなくなかったら自分をバカにみせろ」というわけだ。

10の知識を持っている人間が、3ぐらいしか知らない、といえば「知的に謙虚な人」となり何も知らないといえば「神々しく謙虚な人」となる

しかし、それは自分の発想や想像力を矮小化してしまうことにならないか？

SNSが発達し、すぐに人に叩かれるようになった
誰しもがバカだと思われたくないから
「自らバカにみせる」という知的な振舞いをするようになる
その結果ほとんどの知的な人は、
自らの想像力を枠にはめるようになり
新たな発想が生まれにくくなってないか

(無論、フェイクニュースの問題もあるわけで、知的な振舞いをするこの意味は大いにある)

無論、「無知の知」は知的な行為をする上で大切なことだ

(私は「無知の知」を知りませんよ←知的な振舞い)
)

しかし、「無知の知」を踏まえた上で、自らの想像力に働きかけることであれば新しい発想を

「無知の知」を踏まえて

バカとは何か？
10しか知らないヤツが

その10を起点として、発想を100にも200にも飛ばすことだ
(ところで10の知識ってなに?)

それを「全て事実です」といえばフェイクニュースだが
「全てウソです」といえば
「新しい発想」や「議論」が生まれる契機となるだろう

食事中、妻と私はiPhoneでTVerのコント番組を、娘はポータブルBluRayでディズニーの映画を見ながら、牛肉を食べていた。
途中娘は、手前のポータブルBluRay越しにコント番組に興味を示したので、ディズニー映画を止めようとした。
すると、娘は停めるなという。
気まぐれでやはり、ディズニー映画が見たいのか、と思ったら、やはりコント番組を観ている。
もう一度ディズニー映画を止めようすると、停めるなという。
その間、フォークに牛肉は刺さったまま。

どうやら娘は、手前のBluRayプレイヤーに映るディズニー映画越しのコント番組が見たかったのだ。牛肉の匂いを嗅ぎながら。そして時に牛肉を食べる。

これは何かに似ている。

ゴダールの映画で、テレビに動画が移り、さらに別の映像が重なる、というフレームが多層化された映像だ。

ゴダールは難解というが、子どもも直感的にフレームを多層化して感受する

さらに言えば、ゴダールのソニマージュは、音と光だが、
牛肉の「味」と「匂い」が着いてくる。
ゴダール以上だ。

もっと言えば
目の前で牛肉を食べる自分という「LIVE」と、
牛肉という「death」もある。
これはむしろ大木裕之ではないか。

しかし、娘に足りないものが2つある。
「美術館」と「ステイトメント」だ。
美術館で同じことをやり、ステイトメントを貼り付ければ、
「多層化したフレームと、その厳然の肉体により、現代のメディア受容を表したパフォーマンス」と捉えられるだろう

しかし、そうはならない

ステイトメントがなく
美術館で行われてないからだ

「作家の主張」を尊重した結果、
ステイトメントの範囲でしか、作品について思考できず、
美術館にあるものでしか美術だと扱われないのだ

「ジャンル」なんて提出先の問題でしかないのか？

ここら辺の「美術館いじり」はバンクシーがやってるし、さらにそのバンクシーをチョコレートプラネットがいじるといことで円環的な帰結を迎えたが、依然として残る問題である

あ、バンクシーより前にやってる人いますよね、美術館いじり。
あ、デュシャンか。
なんでもデュシャンの名前出すなって？
すいません

笑いを「異化効果」や「現実への転覆」などの笑いの構造で捉えるまなざしと、「笑いが起きたら笑い」と捉える眼差しでは大きく異なる。

先日東北地方のドキュメンタリーをみた

だいこんつかってますから
笑い

意味不明

しかし笑いが

現実には型がない

短歌・俳句には型がある
映画・演劇には型はあるかどうか分からないが、作品を演劇化・映画化せねばならない。
「ダイレクトシネマ」と言えど「編集」などで映画化せねばならない

詩には型がない
ただ思考や感覚を深めようとする営みがあるだけだ。
だからわざわざ「詩化」する必要がない
思考や感覚をそのまま出せる唯一の表現だ

型がない現実には型がない思考や感覚でダイレクトに対峙する、そして型のない現実からギリギリ
詩という型をつくる
「型なき型」をつくること、それが詩作だ

だから「型破りの詩」など存在しないのだ
「型なしの作品」それが詩だ

「向井君の関西弁」

私は千葉県の公立高校に通っていた。
その高校時代の昼休みに男子4人で喋っていた時のこと。

具体的な内容は忘れたが川北君が冗談を言った。
その時、向井君があまりに不自然なイントネーションでこういった。
「な、なんでやねん！」

絵に書いたようなエセ関西弁である。
如何にも「千葉の高校生がお笑い芸人に憧れました」と言わんばかりの、ド下手な関西弁である。

「向井やってんなー」
誰も口には出さなかったが、皆そう思ったのだろう、座は一気に醒めてしまった。
しかし、よくよく話を聞いてみると、向井君は関西生まれの関西育ち、生粋の関西人だと言う。

我々はざわめいた。
今まで信じていた「関西弁のリアル」が崩れ去ったのだ。

「関東人のイントネーションのような関西弁」が「リアルな関西弁そのもの」だったのだ。もう何を信じていいのかわからない。
自分たちが依拠していた「リアル」とはこの程度のものだった。

リアリティが崩れ去ったまま、昼休みが終わり、5時限目の「現代社会」が始まった。
我々はいつも以上に集中して「ジャーナリズムと真実」に耳を傾けた。

私が考える詩とは「向井君の関西弁」のようなものである。
既存のリアリティを破壊し、現実になたな風を吹かせ、一からリアリティを構築させようと人々を目覚めさせるもの。

自らの考える方向に人々を導くのではない。

どの方向に考えが及ぶかはわからない。
人それぞれちがうだろう。
しかし、「向井の関西弁」以降人々はより深く物事を考えることになる。

「より深く社会や現実に対して考えるように人々を目覚めさせる」こと。
それが詩であり、詩の持つ社会性なのだ。

旧態然とした詩人のブランディングなんて簡単だ。

口数を減らし、さも「便秘に悩んでまっせ」と言わんばかりの苦悶の表情を見せればいいだけ。

そうすれば「難解な現代詩人」の誉にありつける。

既得権益だ。

誤解しないでほしい。便秘の人を馬鹿にしてるのではない。私は下痢気味なので便秘の人にはシンパシーを感じてる。

便秘でもないのにさも「便秘で悩んでまっせ」顔をしてセルフブランディングをしているのは、便秘の当事者への搾取に他ならない。

ファッション便秘野郎。

便秘のポーズ。

便秘のリアルを生きてない。

便秘のポーズが「詩人のイメージを体現」してるのであれば、終わってる。

むしろ、はじまってもない。

まず、便秘のポーズであることを便秘の当事者に謝罪することから始め、新たな詩人像をつくりあげるのだ。

無論、ここで挙げた人物がもし便秘の当事者であれば今すぐ土下座する。

その程度の覚悟をもって私は書いている。

詩はジャンルじゃない、センスだ。既存のものを疑い、捉え直し、新たに思考し、また別の感覚を呼び起こすもの。だから映画でも演劇でも絵画でもコントでもできる。では詩集や朗読会にこだわる理由は？

お笑いやHIPHOPは、笑いとらなきゃ、かっこよくなきゃという制約を、短歌や俳句は五七五という表現方法の制約を、映画や演劇は人数や稽古時間が必要、ジョナス・メカスのような個人映画やギターの弾き語りにはカメラやギターという道具がなきゃいけない

つまり1遍の詩や朗読は、紙とペンさえあればできる、究極の「野良」であり、ありとあらゆる制約から「自由」に詩を突き勧められる、まさに根本芸術なのだ。(しかし、詩集をつくれるかどうかになると、予算あるいは採算がとれるかどうかという問題が発生する。これは現代詩業界の最大の問題だ)

逆に言うと、自由にやりたい放題やらねば詩集や朗読会をやる意味なんてない。

自由にやりたい放題、それも「カッコ良さ」や「面白さ」、「表現形式」の制約を受けずにやる場合、ヘタをすると公演としてはどこまでも、底なしにつまらないものになる。

(この世で1番つまらないものは、つまらない朗読会だろう。つまらない演劇・お笑い・映画の3億倍つまらない。異次元のつまらなさ。しかもその異次元のつまらなさが『割とフツーに』遍在してるので、異次元のつまらなさも凡庸なのだ。つまらな過ぎておもしろい、にもなれない)

逆に言えばヘタさえない朗読会は底なしの自由と面白さを両立させたなんかすごいものになる

なので、朗読をする時は、何らかのテーマをもって、挑むことになる。

いろんなスタイルで朗読しようとか、言葉の語彙の方向性を多方面に見せようとか、動いてみようとか、1歩もうごかずにやろうとか、逆にテーマもなにも持たずにやろう、とか

だから、朗読会の実際の利点としては、
演者が、公演の方向性/テーマ/制約を、自ら設定できる、イニシアチブをもって公演できるところにある

「映画だから～なければならない」「観客に気に入られなければならない」という制約を、ジャンルや徴収に押し付けられるのではなく、自ら設定出来る、その点の利点がある。

橘上は「言語の解体」を意図してない。
言語は既に解体されてる。2つの意味で。
解体されている言葉/現実を前提にいかにして生きれる現実/言語を構築するかをやっている。

言語の解体の二つの意味とは

ひとつはネットやテレビ等様々なメディアで不確かな情報が流布されるポストウールズ/フェイクニュースの現代において。

もうひとつは、そもそも、この現実なんて、ずっとポストウールズではないか？鎌倉時代や平安時代の人だって不確かな言葉に翻弄されてたのではないか。(鎌倉殿の13人)
さらに哲学では「わたしはいまここにいる」ということ自体は疑えない。しかし、詩を書くことの、「もともと解体されてる、不確かな言葉で、確固たる詩をつくる」という矛盾こそが、そこに踏み込める唯一の方法なのだ

詩は世界最高の芸術。しかしおもんな過ぎる。詩人どもは世界最高の芸術にあぐらをかいて、世界レベルにとどまってる。志が低い。おもろい詩をつくれれば宇宙一の芸術になるのに。
しかし、「お笑い」を標榜すれば、「笑いの有無」によって、表現が狭められてしまう。
詩のおもんなさを打破しつつ、かといってお笑いの制約から逃れるという矛盾を生きることが究極の詩だ。その不可能を可能にする、魔法の言葉「笑いが起きたらうれぴ」

笑いが起きたら嬉しいが、笑いをとることを意図しないこと。偶然起きた笑いを甘受しつつ、笑いがなくても「スベった」と思わないこと

詩と笑いは「異化効果」という点で共通している。
あえて違いを言えば、違和感にツッコミがバシッとはまれば笑いが起きるし、違和感(ボケ)を押し進めれば詩に近づく。
行き過ぎたお笑いは詩に近づき、ちょうどいい詩はお笑いに近い。

90年代末期、「一人ごっつ」をやっていた、「爆笑にこだらわなかった」頃の松本人志はお笑いと詩を行き来していた。その他にも「コジコジ」「ぼのぼの」「ゴールデンラッキー」など笑いと詩を行き来している表現が90年代後半にはよく見られた。

M-1グランプリが始まる2000年代からお笑いが爆笑主義になり、詩とお笑いの距離が生まれた気がする。

ドクターハイน์リッヒ/スリムクラブなどの詩のような笑いを表現する芸人もいるが、売れっ子にはなっていない。

「シュールを盾に客から逃げるな」→詩と笑いを分けた鬼越トマホークの呪いの言葉
(お笑いのシュールとシュールリアリズムは完全に一緒ではないが、それはまた別の話)
「ポエムを盾に客を見つめる」

現代詩(紙面での言語表現による詩を便宜上こういう)は、言葉の組み合わせによる芸術。それは服の組み合わせによるファッションのスタイリングにも近い。近年の詩は「無地Tシャツがおしゃれ」に近い、「オシャレになることよりもダサくならないことを再重要視する」ノームコア化していないか？ダサイ言葉は使わないで詩を作る「ノームコア詩人」が増えた気がする。

「わたしは何故ここにいるのか?」「なんで生きているのか?」「あなたが好き」とかそういうダサイ言葉の現実を生きてるのに、そういうダサイ言葉はダサイが故に詩に使われなくなった。ダサイ言葉を着こなしてこそ、詩でありファッションではないのか。ダサイ言葉だから使わないっていう態度は現実に向き合っていないのではないか。

ダサイ言葉を使いながら最終的にはカッコイイ詩になるように意識した。ダサくてもいいんだとは思っていない。

僕個人の言葉もそうだし、山本浩貴+hによるデザイン/レイアウトもカッコ良さをより強化している。

近年のお笑いは詩になり過ぎないように、丁度良い違和感、ジャストのツッコミに特化してる上沼恵美子「スリムクラブの今回の漫才、行き過ぎ」
それは、共感至上主義が蔓延してるSNSと呼応してないか？

日常言語を異化して行くうちにいつの間にか詩になっているという特徴を持つ詩集「複雑骨折」だが、朗読をすると、詩になる直前の言葉で笑いが起こることが多い。詩の言葉として飛躍する直前の「ちょうどいい異化」が笑いをうみやすいのかもしれない

我々は分断された。情報化が進み、全ての情報を網羅しきれず「好きなことや自分の周辺の情報にのみに接しよう」という態度によって

あるいは世界的不況がもたらした、時間的経済的精神的余裕のなさによって。

「自分の周辺以外の情報に触れる時間はないし、そもそもこんなつらい現実なのに、わざわざ興味ないことに時間費やしたくない」というわけだ。

そこで各ジャンルは、お笑いからお笑いを学び、映画から映画を学び、美術から美術を学ぶ人で溢れた

ジャンルの専門性は増し、先鋭化され、スキルアップもしたが、その狭間の表現は見捨てられることになった。

そこで、根本芸術たる朗読の最もプリミティブな表現として、NO TEXTを行い、「ジャンル化される前の言葉」を探り、どのジャンルとも接続しうり、かつ、どのジャンルでもない言葉を探求した

その「ジャンル以前の言葉」を自身を含めた各ジャンルの専門家に受け渡し、今までにない言葉やジャンルの分断を越境しようという試み。また自分の言葉を再検討することで、自らの中の他者性を発見しようという試みである

「全ての情報は追い切れない。故に自分の趣味嗜好に閉じこもる」この状況を打破するためにあえて関係のないであろう領域、ねじれの位置の知識を得る「ねじれの知性」が重要なのだ。

「演劇と美術は関係あるから両方学ぼう」ではなく

「演劇とヒルナンデスは関係なさそうだから観よう」だ

観ることへの問いかけにもなる

橘上は年間100本映画を観る

映画が嫌いなのに

年間2万本映画を観るシネフィルからしたら極端に少ないが

「映画好きが観る2万本より映画嫌いが観る100本の方が価値がある」

何故なら自己という領域をこれほどまでに拡大する行為はないからだ

「普通」は終わった

もはや「普通」なんてない、というところから物事をはじめないといけない

このことを「フラット・オーバー」と名づける

現代美術は言葉を信じすぎ

ステイトメント至上主義になっている

展示の意味がよくわからなくてもステイトメントが意味と価値を示し「品質保証」をしてくれる

仮に「言葉は疑わしい」という展示をやっても

「言葉は疑わしい」という言葉は疑えないのだ

詩であれば「言葉は疑わしい」ということと、「いまここで書かれている言葉も疑わしい」ということを前提に書ける

「いまここで書かれている言葉も疑わしい」

そんな意識がない詩なら読む価値がない

え？

あらかじめ読む価値が与えられていると思うな？

そうだな

「いまここで書かれている言葉は疑わしい」し

「それを読むことに価値があるかわからない」ことを前提として
「それでも書かざるを得ないこと」
「それでも読むしかないこと」
その矛盾を生きる言葉が
人々の感覚・思考の領域を広げ
ポストウルース/フェイクニュースの現在への抵抗になる

ここに書かれてること？
全部ウソに決まってるだろ？
でも俺はウソもホントもわかりきってないので
ウソのウソになって
ホントという大ウソをついてるかもしれないね

山田くんには、まず、今回の作品について。
なにを意識したのか、同時代を見てるのか、これまでとはどう違うのか、NO TEXTを見たあとに
詩作することはそれまでの搜索とどう違うのかを聞きたい。また他者と作品を協同すること、ある
いは、リミックス、リライトについて。
自信が朗読する時に気をつけてることや書く時に気をつけてること、オリジナルとリミックスの違い
あと通常の朗読会と橘上の朗読会はどう違うか、またさらにNO TEXTはどう違うか、思うことあ
れば聞きたい

松村翔子には、今回の作品について。
なにを意識したのか、同時代を見てるのか、これまでとはどう違うのか、NO TEXTを見たあとに
詩作することはそれまでの創作とどう違うのかを聞きたい。また他者と作品を協同することについ
て。書くことにおいてもできるのか

演劇において稽古(練習)とはなにか、練習せずに舞台に立つとはどういうことか、NO TEXTと演
劇はどう違うか、同じところはあるのかなど

ゼロ年代から10年代ごろの詩や上演やそのほかの歴史はあまり語れる立場じゃないけど、ある
程度いうと、

自分は状況を、意識しないで詩を始めた。
短歌における穂村弘、お笑いにおける松本人志、演劇における平田オリザみたいな人が現代詩
にはいない。
今となっては、最果タヒと文月悠光がいるけど、2人は同世代だから。
むしろ、「現代詩の状況がわからずに現代詩手帖に投稿する」という流れは、僕らの頃からあった
し、今も続いている。(小笠原鳥類による、「もっと現代詩勉強してから投稿しろ」)その「ジャンル意
識の希薄さ」が現代詩の特長だと思ってる。

一方で、「映画から映画を学ぶ」的な感じで、「稲川方人から稲川詩史観を学び、文体も影響を受ける」みたいな人も一部でいた。その人らは映画好きが多かった気がする。あまりよく知らない。

また、一部の詩の歴史を学んで、みたいなことを言う人は戦後詩以降から学んでいるので、戦前のモダニズムが抜け落ちていることがあった気がする。(入沢康夫や吉岡実から孫引き的にモダニズムの影響を受けた人はいたけど)

その抜け落ちている歴史を近年鳥居万由実さんが、モダニズム研究等で再検討しているといった印象

ほかはよく知らない。

本番では、山田くんにも喋ってもらお

色々書いたけど、

橘上はどうせほっといても喋るし、まず橘上が喋る的な枠組みはいらないかな。橘上だし。

どっかでテキトーに「トランプに象徴される分断を超えるのに、シネフィル的な閉鎖性ではダメだ、そこで、ジャンル意識希薄の現代詩」みたいな話はします

あとは山本くんというか、いぬのせなか座がやりやすい枠組みに、僕らがいる、みたいな構図の
がいいと思います。

なので、その枠組みで、行きましょう。

質問なんでも答えます

あつ、現代詩人には共通認識がないので、「どうせ話通じないけど話す」みたいな意識がありますね、それ重要かも、みたいな話もします